

縄文人のロマンと触れ合う旅

—「三方五湖」を訪ねて—

新居 哲

昨年（2013）の秋、福井県若狭町の三方五湖を観光した。「三方五湖」の案内文によると、「南から若狭湾に伸びる三方断層に当たる古生代の山脈が沈降して形成された陥没湖である。これらの五つの湖「水月、日向（ひるが）、久々子（くぐし）、管（すが）、三方」にまたがる虹の架け橋ことレインボーラインの中ほどに聳える梅丈岳（海拔400メートル）山頂から見下ろす若狭湾の男性的な日本海と対照に、乙女のようなロマンチックな五湖の壮大にして優雅な風光美はまさに天下の絶景であり若狭湾国立公園の白眉となっている」とある。



梅丈岳の山頂公園の展望台から眺める三方五湖
手前：水月湖、奥左：久々子湖、奥右：三方湖

目を見張らんばかりの巨大な箱庭のような三方五湖の美観が心に沁み、私たちの遙か昔の先祖「縄文人」が同じ風景を愛（めでた）であろうロマンを彷彿とさせるモノがあった。さらに縄文人がこの地の自然の恵み

（湖の恵み、森の恵み、海の恵み）に支えられた豊かな暮らしの名残が随所に感じられた。五つの湖は互いに繋がっている。日本海に直接繋がっている久々子湖、日向湖と一番奥にある三方湖、中間にある水月湖、管湖はそれぞれ異なる塩分濃度により五つの色を放つ五色湖とも呼ばれ、海水魚から淡水魚までさまざまな50種を超える魚が生息している。今も私たちに絶品の鰻（うなぎ）、鱸（すずき）、鰯（ぼら）、黒鯛、シジミ、カキをはじめ湖から獲れる魚介に縄文人も舌鼓を打ったに違いない。

今もなお繁みに富む森が五湖を取り巻く。縄文人は、野鹿、猪、兎、雉子、野鴨、山鳩、山鳥などを狩猟、また、海が穏やかな日和には日本海（若狭湾）へも漁に繰り出し、海の幸を堪能したと思われる。

三方湖の右奥には世界最古と言われる鳥浜遺跡がある。縄文時代の草創期から前期、年代的には、1万5000年～5000年前の古い集落遺跡である。1960年代、最も南にある三方湖に注ぐ河川の改修工事の際、地下3～7メートルの川底の土の中から、土器や石器に加え、木製品や漆製品、縄、紐などの遺物が腐らずに往事の姿のまま大量に出土した。土に覆われた暗い低温の水底で、空気や日光から遮断され水漬けにされていたため、極めて良好な状態で保存されていたものであり、考古学者を驚喜させた。鳥浜遺跡が「タイムカプセル」と呼ばれる所以（ゆえん）である。

これらの多様で豊かな出土品は、縄文人が工芸や装飾、漆の栽培などで高度な技術と文化を保有していたことが立証され、それ以前の旧石器時代の原始人と同じように思われていた縄文人のイメージを一新させた。特に優れていたのが漆製品であった。漆は栽培から樹液の採取、管理、塗布まで高度の技術と工程管理を必要とするが、縄文人はそれらを習得していた。縄文漆器の最高傑作とされる「赤土漆塗り櫛」をはじめ、鳥浜遺跡の漆製品は現代の漆工芸の技術と変わらないレベルというから驚く。2011年、同遺跡から出土した漆の枝が「放射性炭素年代測定法」による分析の結果、世界最古の約1万2600年前のものであることが判明した。漆は従来、大陸から持ち込まれたと考えられていたが、この発見で、縄文人がこの地で独自に造り出した可能性が出てきた。日本固有の文化として鳥浜遺跡の漆に新たな注目が集まっている。

さらにもう一つ重要なタイムカプセルがある。それは五湖のうち最大の面積と最大水深（38メートル）の水月湖のすり鉢状になっている湖底である。そこに実に15万年分の泥が積もっている。この分厚い泥の堆積物には『年縞（ねんこう）』と呼ばれる縞模様が1年に1層ずつ規則的に堆積され、その間の自然や環境の変動を正しく記録している。現在7万年分の年縞まで計測され、地質学や考古学の分野で『Lake Suigetsu』として国際的に知名度が高い。1万年分の縄文人のロマンと15万年分の大地の記憶、この二つのタイムカプセルが同居するミステリアスな三方五湖は、地球が生んだ『奇跡の至宝』と言っても過言ではない。

環境考古学の視点からも重要な意味を持つ。1万年もの長期間、縄文人は生活様式を大きく変えることなく自然と共生してきた。大いなる創造主（神）への畏怖と感謝の気持ちを、縄文人は五湖とそれが織りなす自然に注ぎ続け大切に慈しんできたと思われる。

縄文人は1万年もの長期に亘って、なぜ生活様式を大きく変えることなく過ごしてきたのだろうか。それは豊かだったからに他ならない。五湖で生活する限り、発明や生活改善の必要がほとんどなかったのではないかと憶測される。湖、森、海それぞれの豊富な幸のお蔭で食物・水に困らず、温暖な四季と相俟って、三方五湖と自然環境が縄文人の日常生活によく適合していたものと思われる。

考古学者の人口推計シミュレーションによる縄文時代最盛期の人口は、日本全土で約30万人と言われる。縄文人の人口に比して、魚介類、野生動物、あるいは果実や木の実などが有り余るほど多かったと推測される。一つの大きな集落には、100軒程度の竪穴式住居があったとすれば、一家族平均5人として、500人規模の縄文人が生活していたと考えられる。鳥浜遺跡の縄文人の人口が、同じ程度とすれば、彼らの生活を支えるのに、広大な三方五湖、及びその自然は、十分すぎる恩恵を与えていたことが理解できる。

縄文の当時とはとうてい比較にならない近年の人口増のため、乱獲などにより三方五湖の生態系が狂い始めている。三方五湖は、絶滅が心配されるニホンウナギの生息地の一つであるが、そこから日本海に注ぐ早瀬川で、稚魚のシラスウナギの遡上が途絶えているという。また、昨年（2013年）、三方五湖で行ったニホンウナギの成魚の捕獲調査でも、大部分は資源回復のため人為的に放流した養殖ウナギであり、海から遡上した天然のシラスウナギが成長したものはほとんどいないと結論づけられたそうである。豊富に生息していた魚介類も減少していると聞く。

多層的かつ複雑に関連し合い絶妙のバランスを保っている生態系の一部が崩れると徐々に環境破壊に繋がっていくと言われる。縄文人がこよなく慈愛した三方五湖、そしてわが国の誇る奇跡の至宝を私たちは損なってはならない。縄文人のロマンに想いを馳せながら、人と自然の共生の大切さを改めて感じた貴重な小旅行であった。

なお、梅丈岳の山頂公園には、五湖を見おろす展望台はもとより、「五木の園」「恋人の聖地」「めだか村」「友好の鐘」「薔薇園」「和合神社」「虹にかけける誓いの鍵」「天狗堂」など現代人をなごませる風物詩の数々がある。ご観光をお薦めしたい秀美の景勝地である。

引用文献：日経新聞（夕刊）2012年10月3日「縄文」「自然」湖底に眠る（福井・三方五湖）

以上